
灰かぶらない姫？

直江 アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰かぶらない姫？

【Nコード】

N1427E

【作者名】

直江 アキ

【あらすじ】

セレーデルは父親が死んで柔らかいベッドと平穏を失いました。かわりに得たのは、灰まみれの生活と森に住む自称魔法使いの下僕だけ。それでも毎日、意地の悪い母や姉妹のいじめを乗り越えます。さて、彼女に王子様は現れるのでしょうか！？

〈1〉シンデレラ（前書き）

いわゆるシンデレラの物語ですが、この話の主人公は少しだけ違ってきます。

〈1〉シンデレラ

ある国のある都のあるお屋敷に小さな女の子がいました。女の子は優しい父親と幸せに暮らしていました。

ある時、女の子に母親がいないことを不憫に思っていた父親は新しい妻を連れて帰ってきました。新しく来た母親は大層美しく、二人のやはり美しい姉妹を連れていましたが、彼らは女の子にとっても優しく接してくれました。

しかし、それから間もなくして優しい父親は死んでしまいました。すると継母と二人の姉妹は女の子に辛く当たるようになりました。なんと彼らはその美しい容姿に反して、醜い心根の持ち主だったのです。

女の子はそれまで使っていたふかふかのベッドがある大きな部屋を追い出され、小間使いと同じ生活をして、夜は暖炉の側で寝ることになりました。そうしていつも灰で汚れていたので『灰かぶり』と呼ばれるようになったのです。

シンデレラは毎日毎日から晩まで働きました。毎日毎日くたくたになるほど働きました。

そして何年もたちました。

シンデレラは美しく成長しましたが、相変わらず灰で汚れてたので誰も気が付きませんでした。

その頃、その国の城で王様と大臣が相談をしていました。そう王子様の結婚についてです。

相談の結果、国中に御触れが出ました。

『王子の結婚相手を見つける舞踏会を開く』と。

国中の娘に御触れは広まりました。勿論、シンデレラの美しい二人の姉妹も興奮しました。

上手くすれば王子様と結婚出来るからです。

「シンデレラ、あなたも舞踏会に行けたら素敵だと思わない？」

二人はそう言いながら、シンデレラに身支度を整えさせて美しく着飾ります。

「お義母様、私も舞踏会に連れて行って下さい！」

シンデレラは必死に頼みました。にっこり笑った継母はシンデレラにたくさんの仕事を言い付け、最後にこつ付け加えました。

「仕事が終わったら連れて行ってあげましょう」

シンデレラはいつも以上に働きます。が、馬車の迎えが来る時間になっても終わりません。

「あら、シンデレラったら、まだ着替えてないの？」

「あら、シンデレラはドレスを持っているの？」

着飾った美しい姉妹はクスクスと笑いながら言いました。

そうです。シンデレラは例え仕事が終わったとしても舞踏会になど行けるはずがなかったのです。

なぜなら二人の姉妹のように着飾るためのドレスが一枚もなかったのですから。

可哀想なシンデレラは仕事が終わって、泣きました。

「お父様、どうして死んでしまったの！」

たくさんたくさん泣きました。

そこへ声が降ります。

「泣くのはおよし、シンデレラ」

驚いてシンデレラが顔をあげると、キラキラと輝く妖精が立っていました。

「おまえは舞踏会に行きたいんだね？ それで泣いているんだろっ？」

妖精はそう言うつとふっくら笑います。片手には白金に輝く杖を持っています。

「あたしがおまえを舞踏会に行かせてあげよう。さあ、大きな力ポチャとネズミを四匹連れといて」

首を傾げながらもシンデレラがそれらを持つてくると、妖精は笑って杖を振ります。

するとどうでしょう。

カボチャは馬車に、ネズミは馬に変身しました！

妖精はさらに杖を振り上げ、シンデレラに魔法をかけます。

たっぷりとしたドレスを身に纏い、輝くティアアラをつけたシンデレラはまるでどこかの国のお姫さまのようでした。

「さあ、その靴を履いて」

妖精が杖をもう一振りするとガラスで出来た靴が現れました。

恐る恐るシンデレラが足を入れると、靴はまるで吸い付くように彼女にぴったりでした。

「さあ、舞踏会に行っておいで。ただし 魔法は真夜中には消えてしまうよ。十二の鐘が止む前に帰ってこないと大変なことになるからね」

妖精はそう言うつとシンデレラを馬車に乗せました。

「ありがとう、妖精さん！」

シンデレラを乗せた馬車はお城に向かいます。

一方、お城では王子様がたくさんの着飾った娘たちに囲まれました。皆、王子様を射止めようと必死です。その中には美しい二人の姉妹もいました。

けれど、どんなに着飾った娘を見ても、王子様の心は動きませんでした。

そこへ遅れてシンデレラが到着します。

二人は一目で恋に落ちました。

王子様はシンデレラをワルツに誘います。

「まあ、あの美しい方はどなた？」

「なんてほつそりとしているのでしょうかー！」

「それになんて贅沢なドレス！」

人々は称賛と嫉妬でシンデレラを見つめます。

ワルツを何曲も王子様と踊り、シンデレラははっと気が付きました。

「今は何時!？」

その時、ちょうど時計塔がボーンと鳴りました。
十二時です！

シンデレラは真つ青になって駆け出しました。

「私、帰らなければ！」

そうです。魔法は真夜中に解けてしまうのです。

シンデレラは引き留める王子様の腕をすり抜け、城門まで走りま
した。慌てて王子様も追いかけてます。

「待ってくれ、君！」

シンデレラはしかし止まりません。あといくつかで鐘の音が止ん
でしまいます。そうなれば着飾ったシンデレラはまた、元の汚い灰
にまみれた彼女に戻ってしまうのです。

「君、待って！」

シンデレラは王子様の制止を振り切り、ドレスの裾をつまんで階
段を駆け降りました。

しかし ガラスの靴が片方、脱げてしまったのです。

けれど、取りに戻る暇はありません。仕方なくシンデレラは裸足
で走り続けます。

王子様はシンデレラを階段で見失ってしまいました。ただキラリ
と輝く繊細なガラスの靴だけがそこに残っていました。

次の日。再び、御触れが出ました。

『ガラスの靴にぴたりと合う足の持ち主を王子様の花嫁にする』
と。

娘たちは色めきます。ガラスの靴が履ければ、王子様と結婚出来
るからです。

しかし、どんな娘が履いても靴は小さすぎて入りません。

美しい二人の姉妹も試しましたが、二人の足は先が入っても決
してぴたりと合うことはありませんでした。

「この家にはもう娘さんはいませんか？」

使者がそう言うと、継母は答えます。

「いることはいますが、その娘はとても汚くて『灰かぶり』と呼

ばれているんですよ。王子様の花嫁があの子のわけがありません」
しかし、使者は国中の娘に履かせる命令を受けていたので、シン
デレラを呼ぶように言いました。

間もなくシンデレラがやってきました。

使者がガラスの靴を履かせると、シンデレラの足はどこにも引っ
掛かることなくぴたりと、靴に収まりました。

「おお　ぴったりではないか！」

そこでシンデレラはもう片方のガラスの靴を取り出しました。

「あの晩、王子様とワルツを踊ったのは私です」

シンデレラはそれから王子様と結婚して、生涯幸せに暮らしまし
た。

これがよく知られるシンデレラのお話。

けれど　この物語のシンデレラは『ちよつと』違います。

物語の始まりは、ある国のある都のあるお屋敷で……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1427e/>

灰かぶらない姫？

2010年10月16日00時22分発行